

落胆の色を隠せない様子だった。事の次第を知った日本の学者たちは、それは滞在期間が短いことに起因するといった慰め、腰を据えて研究を続けるために再来日するようにすすめた。すると、

「長期間滞在すれば望みが叶うような状態ではないと思うが、折角のご助言だから100年後にもう一度考えてみましょう」と穏やかな口調ではあったが、鋭い言葉が返ったきた。

瀬戸臨海実験所所蔵の図書・資料について

瀬戸臨海実験所所長

教授 原 田 英 司

理学部附属瀬戸臨海実験所図書室は、海洋生物学関係の蔵書が国内では最も充実しているとされている。資料庫は実験所で最初に建てられた鉄筋コンクリート造の建物で、ここに図書室がある。その書庫は面積約100㎡で窮屈を忍んで中二階を設けて書棚が並べてある。一講座相当の施設の図書室としては破格のものである。70年近い歴史の中での先人の努力の象徴に外ならない。

とは言え、最近は関連分野の幅が広くなり、新しく出版される雑誌も多く、必ずしも随一の完備したものと言える状態ではない。特に、単行図書に関しては、元々格別特色ある収集がなされていたわけではなく、また近年の出版洪水にとても応じていけるものではない。しかし、過去の業績がいつまでも参照され重要さを失わない、ある意味では過去に縛られ続ける宿命を背負った系統分類学の分野で海洋生物に関連した蔵書としては、今なお最も充実していると認められよう。

その第一は、19世紀から20世紀にかけて世界中で盛んに行われた海洋調査の生物関係の主要な調査報告書が揃えられていることである。実験所が創設された際に和歌山縣から寄贈された「Den Danske Ingolf-Expedition」・「Beiträge zur Naturgeschichte Ostasiens」・「Fauna und Flora des Golfes von Naepel」は、大学側の意向に添ったものであろう。その3年前に誕生した理学部の動物学教室図書として購入された「Reports on the Scientific Results of the Voyage of H.M.S.

Challenger during the Years 1873-76」(いわゆる Challenger Report)・「Sibiga-Expedition」・「Résultats des Campagnes scientifiques accomplies sur son Yacht par Albert I^{er} Prince souverain de Monaco」などは、現在は実験所の図書室に所蔵している。「The Carlsberg Foundation's Oceanographical Expedition round the world 1928-30 and previous "Dana"-Expeditions under the leadership of the late Professor Johannes Schmidt」(いわゆる Dana Report)・「The Percy Sladen Trust Expedition to the Indian Ocean in 1905」などは実験所で購入したものであり、「Discovery Reports」・「The John Murray Expedition 1933-34 Scientific Reports」・「South African Animal Life. Results of the Lund University Expedition in 1950-1951」などは瀬戸臨海実験所振興会からの寄贈である。これらに所蔵された論文の多くは、海洋生物の系統分類学的業績として今なお重要なものであるが、例えば、Challenger Reportにある日本に立ち寄ったときの記事などは読物としても興味深い。

第二は雑誌類である。最近では出版社から刊行販売される雑誌や学会誌が多くなり、またそれに切り替えられたものも少なくないが、かつては大学や研究機関の出版物が重要な位置を占めていた。そうしたものの多くは、相互交換などの形で寄贈を受けられた。実験所では独自の研究報告(Publications of the Seto Marine Biological Laboratory)を出版しており、これが国内外の雑誌類の交換寄

贈を受けるのに大きな役割を果たしてきている。現在、実験所で受け入れている学術雑誌類のタイトル数は、諸種合わせて1200を超す。

第三は論文別刷などを含む寄贈個人蔵書である。実のところ、海洋生物関係の雑誌としては最も古い部類の「Journal of Marine Biological Association of the United Kingdom」・「The Biological Bulletin」の最初の相当巻は、動物学教室教授で実験所幹事を務めた故岡田要教授の寄贈によって完備したものである。「Archiv für Protistenkunde」は故阿部徹法政大学教授の寄贈蔵書に含まれていたものであり、その他の原生生物に関する図書・論文別刷も充実した貴重な収集である。故内海富士夫教授の寄贈蔵書の八放サンゴ類・フジツボ類関係の論文別刷は比類のないもので、多くの人々に利用されている。また、Ch. Darwinの「A Monograph on the Sub-class Cirripedia, with Figures of All the Species」(1851)やFritz Müllerの「Für Darwin」(1864)の原本もある。井狩二郎・野沢兼文・駒井卓・山路勇・時岡隆などの旧実験所教官から寄贈された図書・論文別刷も多数ある。

こうして、蔵書を充実するのにいろいろな手だてを講じているのは他の図書室と変わるところがない。しかし、それらを有効に利用に供するとなると問題は多い。単行図書・雑誌はまだしも、所蔵する論文別刷が一覧・検索できるようにすると少々作業ではない。一部については図書カードを作成しているが、これが完了する見込みはまずない。雑誌・単行図書についても問題がな

い訳ではない。実験所の図書室では雑誌を“地理的”に、発行地国別に、配列している。慣れればどんな方式であっても不便はないが、初めて訪れる人には評判は良くない。加えて、薄くて見付け難いものもあり、また随時移動も余儀なくされる。こうしたことから、数年前から受け入れ雑誌についての情報をコンピューターデータベース化する作業を進め、外国雑誌については昨年完成させた。これによって、所蔵雑誌と所在(書棚番号)の一覧を掲出するとともに、必要に応じて利用者も所蔵雑誌の最新情報を調べうようにしている。

実験所には図書の外に生物標本などの多数の資料がある。付設水族館で飼育展示している動植物は重要な教育資料に外ならない。こうした標本の中に、いわゆる模式標本といわれる、新種が初めて報告されたときに基礎とされた標本がある。学問上の約束で、これは適切に保存保管するとともにその情報を公表することが、所蔵する研究機関に義務付けられている。実験所には動物350種余りがあって、研究棟の標本室に保管されている。この情報をやはりコンピューターデータベース化する作業を進めてきたが、ようやく完了したので、実験所研究報告に発表する予定である。また、八放サンゴ類などの将来の研究資料として貴重な収集標本も多数ある。変わったところでは、実験所建物の工事に際して発見された瀬戸遺跡の出土品の一部もある。

図書・資料は利用されてこそ意味があるもので、そのためにも可能なかぎり手を尽していきたい。

平成元年度 高額図書の購入報告

1. 継続図書

(1) 複数分野

- ・ Bibliographic Guide to Government Publications.
- ・ OECD Publications.

- ・ 国際連合・国際機関及び主要国統計

(2) 社会科学

有価証券報告書総覧(第1部上場)

(3) 自然科学

Sadtler Spectra : Infrared Grating.